



今月新しく入りました。

●一般の本

／君は嘘つきだから、小説家にでもなればいい（作＝浅田次郎）／蝸ノ記（作＝葉室 麟）／夢違（ゆめちがい）（作＝恩田 陸）／星月夜（作＝伊集院 静）／母さんのコロッケ（作＝喜多川 泰）／ドルチェ（作＝菅田哲也）

●子どもの本

／かいけつゾロリ はなよめとゾロリじょう（作＝原 ゆたか）／アッチとボンとドララちゃん（作＝角野栄子）／だれのごはん？（作＝たかいよしかず）／なぞなぞのみせ（作＝石津ちひろ）／ふわこおばさんのぱーてぃー（作＝ディック・ブルーナ）

中でもこの本が **オススメ** です。

「あの日」に生まれてきた命

作＝鮫島浩二（監修）



わたしは、この地でお母さんになりました。震災直後、医療器具も何もない民家で出産したお母さん、臨月で津波に遭ったお母さん、避難所から母乳を毎日病院に届けたお母さん…。あの東日本大震災から、もうすぐ1年。大震災を生き抜いたお母さんと子どもたちの奇跡のエピソード。

ねえママ

作＝こやま峰子



ママは朝から大忙し。おでかけすることになっても、すごい早足。今日一日、ママが忘れてしまっていることは？1分でいいから今「ぎゅう」してほしいな…。子育てに忙しいママに贈る、ほっとできる絵本。



下山の思想

作＝五木寛之

凜と生きる。時代は「下山のとき」である。ゆっくりと安全に下山に向わねばならない。下山の途中で登山者は登山の努力と労苦を再評価、海が見えたり町が見えたりと下界を眺める余裕も生まれてくるだろう。自分の一生の来し方、行

く末が始めて見えてくるように思う。頂上を極めたあとは下山しなければならぬ。それが登山というものののだ。下山とは、あきらめの行動ではなく、新たな山頂に登る前のプロセスだという。



星の王子さま

作＝サン＝テグジュペリ

本は、人間にわかっていないことをよびおこされる。心の目で大切にしていかなければならぬものを感じとり、それを生かしていくことで人は豊かになれるはず。本に大切なものは目に見えない。現代に生きる私たちの心の

中では砂漠化が進んでいる。日々、取り上げられる悲しい出来事の多い事。サン＝テグジュペリが生きた時代も現代も人と人のつながりがどんどん失われつつある。私たちは身近なものにだけ愛を感じ感謝し、幸せを感じているか、今まさに反省の時である。

春の桜、夏の海、秋の紅葉、冬の雪…。美しい四季が体感できるのは日本人の特権。そんな私たちがだからこそ、読みたくなる「旬」の本があります。シリーズ「旬の本だな」。3月は「生きる」をテーマに2冊の本をご紹介します。紹介者は河野たまきさん（いずみ読書会）です。



Health

ADVICE

Dr. 鈴木の

町立病院スタッフ
からの健康
アドバイスです

調子はいかが？

町立病院 ☎42局1231番



以前から右耳の聞こえが悪く、耳だれもときどき出ます。最近では耳をいじるとめまい感もあり、たちの悪い中耳炎があると聞きましたが（45歳・男性）

【中耳炎について】

鼓膜の奥の空洞である中耳に炎症が起こる中耳炎には急性と慢性があります。急性中耳炎は風邪などに伴って子どもによく起こります。薬の効かない耐性菌の感染によって治りにくくなることはありますが、抗菌薬の発達した現在では比較的容易に治すことができます。これに対して慢性の経過をたどる中耳炎には、滲出性（しんしゅつせい）中耳炎、癒着性中耳炎、慢性中耳炎、真珠腫性中耳炎などがあり、特に真珠腫性中耳炎の場合、放置するとめまい、聾（ろう）、顔面神経麻痺、髄膜炎、頭蓋内膿瘍などの重い合併症を起こすことがあります。早期に的確な診断・治療を受ける必要があります。

【真珠腫性中耳炎の特徴】

真珠腫性中耳炎とは鼓膜の一部が奥のほうに窪んでポケット

ト状となり、その中に耳あかがたまる病気です。いわゆる「耳ぬき」の機能が悪いのがその原因と考えられています。たまたた耳あかの内部は、外耳道にもともと生息する細菌の絶好の繁殖場所となります。最初の症状として耳だれと耳閉塞感が出現します。真珠腫がもたらす大きな問題は、次の段階で起こる骨破壊性にあります。中耳は側頭骨という硬い骨の中にありますが、真珠腫はその周囲に接した骨を侵食する性質を持っています。骨が侵食されるとポケットの大きさが一回り拡大し、さらに耳あかの蓄積が進むという悪循環に陥ります。最初に鼓膜の裏面に付いている耳小骨が壊れて難聴が次第に進行していきます。次に内耳にまで破壊が進むと、激しいめまいが起こり、聴力も完全に失われてしまいま

す。顔面神経が侵食されると顔が歪む顔面神経麻痺が起こります。中耳は脳とも隣り合っており、頻度はそう多くありませんが放置すれば髄膜炎、頭蓋内膿瘍などの重い合併症が起こる危険性も出てきます。

【診断】

耳鼻咽喉科を受診すれば診断は比較的容易です。鼓膜の一部にポケット状の深いくぼみがあり、耳あかや耳だれが認められれば真珠腫と診断できます。次に進行の度合いについての診断が必要となりますが、これには聴力検査とX線CTが重要です。鞍手町立病院が所有するX線CTは高性能なため、0.5mm程度の大きさの骨の状態を描き出すことも可能です。細菌検査も治療をする上で重要な手がかりとなります。

【治療】

初期の真珠腫では通院で対応できることもありますが、進行例では多くの場合手術が必要となります。従来は局所麻酔での手術も行われていましたが、今ではほとんどが全身麻酔で行われます。入院期間は病状によっても異なりますが、おおよそ2週間程度を標準としていきます。手術では、①真珠腫を完全に取り除く、②聴力を改善させる、③術後のメインテナンスを容易にする、の3つを目標とします。真珠腫に対する手術法に関しては過去半世紀にわたり議論されていて、絶対的にこれが正しいというものも確立されていません。いろいろな術式が考案されており、また治療法はそれぞれの患者さんによっても異なります。気になる症状のある場合はぜひご相談ください。



【アドバイザー】

鈴木秀明さん・すすきひであき・昭和58年東北大学医学部卒業。米国ワシントン大学、ジョンスホプキンス大学に留学。平成8年国立仙台病院耳鼻咽喉科医長などを経て、平成15年11月、産業医科大学耳鼻咽喉科教授に就任。

鼓膜の奥の空洞である中耳に炎症が起こる中耳炎には急性と慢性があります。慢性の経過をたどる中耳炎には早期に的確な診断・治療を受けることが必要なものもあります。早めの診断をお勧めします。